

2008→2017

about ART adviser

台東区アートアドバイザーとは

「台東区の文化政策についての提言」を受け、台東区内在住など区にゆかりのある音楽・美術・舞台など異なる分野の芸術家や専門家から構成されています。アートアドバイザーには、自由な発想で台東区の文化とはなにか、これからの台東区の個性ある文化の表現は何かを発言していただき、台東区の文化施策への芸術家参画を図ることを目的とする台東区アートアドバイザー会議に参加していただいています。また平成20年度より開始した「台東区芸術文化支援制度」では、支援対象となった企画がより魅力的に実施できるようサポートを行っています。

2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017



Takuo Ikeda



Yoko Kanze



Sumiko Kumakura



Fumihiko Sumiyoshi



Kakushin Tomoyoshi



Shintaro Ban

台東区芸術文化支援制度発足10年特別企画 アートアドバイザー座談会

Art Adviser Meeting

>> 台東区が芸術文化支援制度をスタートした経緯を教えてください。

友吉:

きっかけは私が台東区にお声掛けさせていただいたことでした。それまでの台東区は、芸術文化財団が主となって文化行政が行われていましたが、それは区がある程度プロデュースして進行していくもので、正直個人的に物足りなさを感じていました。もっと台東区としてアートを盛り上げていくためには、アーティストと街のコラボレーション、そしてそういった企画を支えるバックアップが欠かせません。ですが、そのためにはやはりお金がかかってしまいます。そこで台東区に、若手のアーティストを支援する

台東区芸術文化支援制度発足10周年を記念して区の芸術の発展を支えてきたアートアドバイザーの皆様が台東区のこれまでとこれからについて語っていただきました。

制度をお願いしました。

坂:

アートアドバイザーという仕組みもその時に提言されたのですか？

友吉:

そうですね。せっかくならきちんとした審査制度を設けて、ただお金を出すだけでなくアドバイザーと一緒に作り上げていけるような仕組みにしたかったです。アドバイザーの実際の選定は、当時の台東区の文化振興課の方々にメインとなって進めていただきました。

住吉:

でも、私たちアートアドバイザーは、「台東区の文化発展に貢献したい」という想いは同じですが、実は

戸籍や出身地は様々なんですよね。色々な立場、考え方を持つメンバーが集まったことは、結果的にとてもいい構成だったと思います。

池田:

私は台東区民でもなければ芸大の先生でもないし、ましてやアーティストでもありません。ただ母方の本家が御徒町という地縁だけがありました。ですから、選ばれた時は驚きましたね。しかし文化的に恵まれた土地で芸術に携われることは、またとない機会。大変光栄だと感じています。台東区には、芸大や芸術院、博物館や美術館など、立派な文化財が

数多く存在しますから。

友吉:

もちろん台東区に縁のある坂さんや住吉さん・観世さんのような方も欠かせませんが、区にあまり関係のない人にも参加してもらわないといけなだろうという話を、当時の文化振興課の方々とした記憶があります。

熊倉:

池田さんは台東区にはたくさんの文化施設があるとおっしゃっていましたが、実は10年前は、台東区はそのメリットを活かしきれていないことを課題として捉えていました。私たちのように台東区で芸術活動に従事している人間のあいだでさえも、ここから若いアーティストや新しい芸術が生まれてくるようなイメージはありませんでしたから。

友吉:

そういった状況を変えたかったという面もあり、この制度の発足を提言しました。

住吉:

私は、この制度ができたおかげで活動しているアーティストたちの芸術に対する姿勢が変化してきたと感じています。みなさんはいかがですか。



Art Adviser Meeting



池田：
新しいものや好奇心をそそるものをどんどん取り入れていく雰囲気が台東区のアーティストに芽生えてきているような気がしますよね。また、区外でも少しずつですが「台東区で文化活動がしたい」「台東区はアートの街」というような風潮が生まれ始めたと思います。

観世：
支援対象者を台東区在住限定にしなかったことが、良い影響を生んでいると思います。そのようにした経緯はあまり覚えていませんが、結果的にいろんな才能ある方を台東区に招けていますよね。

熊倉：
実際にこの制度をきっかけとして台東区で芸術活動をスタートさせ、そのまま台東区に拠点を作った方もいます。申請するアーティストたちも審査する私たちも、その企画に対して真剣に向き合い、着実にかたちにできていることは嬉しく思いますね。私たちはこの素晴らしい制度を、もっといろんな人に知ってほしいと思っています。

池田：
毎年の説明会は、制度の魅力を知ってもらいたい

チャンスですよ。ただ制度の説明をするのではなく、前年の支援対象者が担当アドバイザーと登壇し、それぞれの立場からこの制度について語ってもらう仕組みは、非常に貴重な、魅力的な時間だと思います。

坂：
そうですね、この制度の肝のひとつと言える部分です。また、支援対象者自身がこれからの人たちに語ることで、アーティストの熱が伝わり受け継がれていくような気がします。今後説明会に参加される方には、ぜひ注目していただきたいですね。



>>印象に残っている年度もしくは作品はありますか？もしあった場合はその理由を教えてください。

熊倉：
印象に残っているのは、平成28年度採択の「吉原芸術大サービス2016」です。会場は吉原神社や吉原弁財天を中心とした千束3丁目・4丁目周辺地域。総勢17組のアーティストたちが美術作品の展示や、様々なパフォーマンスや伝統芸能のライブを開催しました。このプロジェクトは、荒れ果てた吉原弁財天を蘇らせるために1人で改修を始めたおじいさんからの要望を受け、近くに住む若い芸術家たちが、壁画を制作し奉納したことから始まりました。芸術家は街の要望に技芸で応え、街は芸術家に発表の場を与えるというカタチになりましたよね。

坂：
あの作品はただ芸術をならべたわけではなくて、アーティストとして社会とどう向き合っていくかという気持ちが見られました。どういう問題意識を持って、自分たちの作品を表現していくか、と。社会性を持った若いアーティストたちがこの街にもたくさんいると分かって嬉しかったです。

住吉：
あの年で4回目を迎えた企画で、支援対象者と地元の方々の連携が強くなっていました。またそれだけでなく、支援対象者同士の横のつながりも出来ていて、区内の色々な会場をアートで盛り上げていただき嬉しく思いましたね。

池田：
作品はもちろんですが、芸術活動を通して、人と人が交流を深めていく様子を見られることも面白い。世代も出身地も違う者同士がコラボレーションできるということは、芸術の醍醐味と言えるでしょう。

>>採択審査をする上で心がけていることを教えてください。

熊倉：
審査基準は、行政のことも考えていくつかの要素を定めました。そして申請されるアーティストの方々への想いももちろんですが、我々アドバイザーの想いや期待も反映される仕組みとなっています。

観世：
いろんな観点で審査させてもらっていますが、最終的

Art Adviser Meeting

その誠実さや純粋さに多くの人たちが巻き込まれていく。そういう風にして社会を動かしていくのが正しいアーティストの姿だと思います。だから「これで観光客を喜ばせなければならぬのではないかとか、そういうことはあまり考えて欲しくないとも思います。

住吉:

僕はシンプルに、もっと我々を驚かせて欲しいと思っています。社会性や社会常識がゼロでは困りますけれども。

観世:

ちゃんと企画を成就させようと思ったら、社会性も必要ですからね。熱い想いを届けるためにも、社会性は持ってもらいたいですね。

のであれば、私は熱い想を持った人に出会いたい。先ほど責任感という話もしましたが、やはり若い方々の熱意を応援したいというのがこの制度の骨子ですから。

観世:

私も友吉さんと同じで、熱い想を持った作品に出会いたいと思っています。同じアーティストとして嫉妬するくらい作品を見たいですね。

池田:

自己制限をせず、自分たちが本当にやりたいと思う企画そのまま、申請の段階で出して欲しいです。「これを言ったら断られるのではないかとか」「こう書いたら採用されるのではないかとか」、そういった気持ちは極力排してもらいたい。とにかくアーティストらしく、前例にとらわれず、躊躇せず、そして世の中を変えてやろうと。そういう無茶苦茶なエネルギーに期待したいです。

坂:

そういう気持ちは申請の書類に現れますし、私たちもそれをしっかり感じています。

熊倉:

普通の人が常識や正論で考えちゃうようなことを突き抜けたものには、ある種の誠実さがある、



にはやっぱりシンプルに、その企画を「見てみたいか」ではないでしょうか。

池田:

そうですね。我々も一緒になってその企画を作り上げる立場になりますから、こちら側の気持ちも駆り立ててもらえるものが良いです。

友吉:

私は、情熱と責任のバランスを大切にしています。ただ情熱があるだけではなかなか採択できません。区民の方々の税金を使わせていただく以上、我々も責任を負って審査しますし、申請される方もその辺りをきちんと意識してもらいたいと思います。

坂:

申請に関してですが、書類では自分を正直にさらけ出してくれたら、と思います。優等生なものばかりでは面白くない。私たちが想像できないようなアーティスト的なものに会えることが一番の楽しみであるわけですし、今後もそうであって欲しいと思います。

友吉:

年度によってテーマを設けたり、審査基準を変えるといったことはしていませんが、ただこうして10年を振り返ると結果としては変化を感じますね。

池田:

申請する側も審査する側も同じ時代の空気を吸っているの、なんとなくセンチメントとしての変化があったのかもしれないけど、あくまで結果として起こったことでしょうね。

>>今後どんな作家、作品に出会えることを期待していますか？ また、若いアーティストに対してどのような心持ちで作品づくりをすればいいかメッセージをお願いします。

友吉:

基本的にアーティストは、どんな立場でもアーティストなので私たちが偉そうにアドバイスできるようなものではないと思うんです。でも、あえて言わせてもらえる



Art Adviser Meeting



そのほかにもいろいろな会議を行います。もう皆さん本当に言いたいことを言いますから。

熊倉：
確かに辛辣な意見も飛び出しますよね。最初は「こんなこと言ったら大丈夫かな…」なんて躊躇うこともありましたが、今はあまりそんなことはありません。

池田：
「若手をアドバイザーに入れよう」ということは日々、検討課題に上がっています。アートアドバイザー制度を次世代に継承していくことも、考えなければ。ただ、結局重要なのは芸術のコンテンツ自体です。私たちが加齢してきても、応募して下さる企画に新鮮な切り口があれば、台東区の芸術文化やこの制度は盛り上がりますよね。ある程度の時間を費やして、どんな企画が来ても対応できる柔軟性を、このチームは身に付けることができました。

観世：
私は今後、もっと「本物」を台東区の方々に知ってもらいたいという気持ちが大きいですね。個性あふれる現代の作品も大事ですが、伝統的な芸術から得られるものも大きいですね。

池田：
確かにそうですね。私は先日、クラシック音楽の定期演奏会を聴きにニューヨークへ行ったのですが、そこのお客さんが白髪の方がかりで、10年経ったら誰も聴きに来なくなるのではないかと思いました。やっぱり台東区の武器である豊かな伝統を大事にしつつ、新しい切り口で次の世代につなげていくということは重要な課題です。

住吉：
そうですね。芸事と世間一般のあいだに距離感が生まれてきていることは日々感じています。

熊倉：
私は台東区に「古典の日」の文化を定着させたいと企んでいます。実は、紫式部の源氏物語を確認できる最も古い日付にちなんで、11月1日が古典の日なのですが、まだまだ認知はされていません。その日に、パリのフェット・ド・ラ・ミュージックのような感じで、街全体で芸術を発信すれば面白い試みになるのではないのでしょうか。

観世：
いいですね。やっぱり実際に芸術作品を見てファンになる方を作らない限り未来はありませんから。

友吉：
我々はそれぞれ芸能活動を行っていますが、本当の意味でこれから先の古典芸能を継承するのは、演じている我々ではなく見に来てくださっている方々だと思うのです。チケットを買ってCDを買って、また観たい、また聴きたいと思ってくださるような方が継承者だと思います。

坂：
確かにそうですね。私にもそんな感覚があります。でも、そのためにはアーティスト自身に多くの人を惹きつけるような魅力がなければいけませんね。

熊倉：
だから規模は小さくてもいいから、もうちょっと区全体で次の世代を育てるような仕組みが必要だと思います。宝塚や最近のアイドルみたいに、ちょっと鼻屑目で育てる。そうすれば実力あるアーティストがどんどん出てくるのではないのでしょうか。

池田：
あと、これからは参加型のワークショップなんかもやってみたいですね。私自身、生け花のワークショップに参加して思ったのですが、自分の感覚で作ったものをプロの先生に褒めてもらえるのが嬉しいし楽しいですよ。そういうアプローチでの普及活動を、もうちょっとこの制度をベースに考えて行きたいです。

住吉：
供給者と消費者っていう線引きを、これからはなるべく曖昧にすべきなのかもしれませんね。芸術を誰かに教わるっていうのは、消費者でありながら、マインドとしては供給者ですから。

観世：
そうですね。それによって、芸術は素晴らしいということを再び認識してもらいたい機会になるかもしれませんね。この支援制度で、今後どこまで実現できるかは分かりませんが、まずは芸術に触れてもらうことが一番です。

熊倉：
もう少し規模が大きくなって、華やかなものが支援できるようになると、この制度の知名度も上がります。今はそんなに規模の大きいものは作れませんが、スタートするきっかけとしては非常に良い制度だと思います。これからもこの制度の継続を目指し、台東区の職員の方々と試行錯誤しながら、芸術文化の発展に貢献していきたいと考えています。

アドバイザー平野真敏氏 コメント

Masatoshi Hirano

>>支援制度10年間の総括

この支援制度から生まれた企画は、10年をかけた台東区のほぼ全域で実施されました。各々、視覚聴覚、触覚に訴える創意工夫された作品が並び、私自身たのしく鑑賞してきました。作品が仕上がる過程において、町会をはじめそこにお住まいの方から地に着いた言葉をいただくことで、より味のある企画に変わっていくところが、この支援制度の醍醐味のように思えます。終演後、お客さま、演者、そしてそれを見守る地域の方々の清々しい風通しの良さを見るとき、台東区発であるこの制度の意義をいつも感じます。

>>今後に期待すること

台東区は、腕前一つで社会に発信している方が多くお住まいの街です。美しさ、手際の良さを自然に日常生活の中で学ぶには、これ以上の環境はありません。そして、その未来を継ぐ多くの子供達も就学しています。この支援制度で選ばれた企画が、単発のものでなく区内の芸術、産業、教育の架け橋になり、更に大きな役割を果たされることを望みます。

(平野氏は、都合により座談会欠席)

Art Adviser Profile

台東区芸術文化支援制度 アートアドバイザープロフィール



観世 葉子

Yoko Kanze

俳優

東京都出身。能楽師八世観世鍔之丞の長女として生まれ、6歳で能「隅田川」の子方として初舞台。桐朋学園短期大学部演劇科に進み、同演劇専攻科卒業。1976年劇団民芸の研究生となり、秋元松代作・渡辺浩子演出「七人みさき」藤役で初舞台を踏み、「アンネの日記」・「夜明け前」・「どん底」等の作品に出演。1995年退団以降、ジャンルを問わず、面白い演劇を目指し活動中。したまち演劇祭実行委員会委員。台東区在住。



池田 卓夫

Takuo Ikeda

日本経済新聞社デジタル編集本部
コンテンツ編集部記者

東京都出身。1981年に早稲田大学政治経済学部卒業、(株)日本経済新聞社に編集局記者として入社。産業部、証券部、国際部、広島支局、欧州編集総局フランクフルト支局、文化部を経て、2012年よりデジタル編集本部に所属。日経ホール、紀尾井ホール、三鷹市芸術文化センターなどの演奏会プロデュースや司会・解説・通訳(ドイツ語・英語)、オペラ公演のキャスティング、音楽コンクール審査員なども行う。12年、エグゼクティブプロデューサーを務め、会津若松市で初演した新作オペラ「白虎」(加藤昌則作曲)は三菱UFJ信託芸術文化財団の佐川吉男賞を受けた。



熊倉 純子

Sumiko Kumakura

東京藝術大学大学院国際芸術創造
研究科教授

慶應義塾大学及び大学院で美学・美術史を専攻。大学院在学中にフランス留学し、パリ大学で6年間、現代美術論を学ぶ。帰国後、1992年から2002年まで(社)企業メサナ協議会事務局に勤務。企業の芸術文化支援活動の促進に従事する傍ら、アウトリーチや芸術NPO、アーティスト・イン・レジデンスなどの調査研究に携わる。2003年に東京藝術大学音楽学部の新設された音楽環境創造科に就任。社会と芸術を結ぶ人材の養成に携わる。2016年4月、新設の大学院国際芸術創造研究科で研究科長を務める。東京都芸術文化評議会文化都市政策部委員、文化庁文化審議会文化政策部会委員等を歴任。



住吉 史彦

Fumihiko Sumiyoshi

株式会社ちんや代表取締役社長

台東区浅草生まれ。1996年株式会社ちんや入社。2001年株式会社ちんや代表取締役社長に就任。現在浅草料理飲食業組合副組合長、浅草うまいもの会広報宣伝委員長。国際観光日本レストラン協会理事・関東支部副支部長。公益財団法人台東区芸術文化財団の事業に数多く協賛。主な協賛事業：奏楽堂デビューコンサート、奏楽堂日本歌曲コンクール入賞記念コンサートなど。



坂 真太郎

Shintaro Ban

能楽師シテ方観世流

撮影：西森路代

重要無形文化財総合指定保持者。公益社団法人能楽協会東京支部常議員。台東区根岸生まれ。能楽師・坂真次郎の長男。3歳で仕舞『老松』にて初舞台。東京藝術大学音楽学部邦楽科能楽専攻卒業。在学中に安宅賞を受賞。イギリス、スペイン、ベルギー、アメリカなど海外公演にも多数参加。1981年(第2回公演)より、台東新能に出演。たいとう観光大使。台東区在住。



友吉 鶴心

Kakushin Tomoyoshi

薩摩琵琶奏者

台東区浅草生まれ。幼い頃より様々な伝統芸能を学び、両祖父の偉業である薩摩琵琶の継承・発展を志し、鶴田錦史に師事。祖父の名跡を世襲。文部大臣奨励賞NHK会長賞等々受賞。宮家御前演奏・国立劇場主催公演・台東区芸術文化財団主催公演を始め国内外で様々なジャンルとセッションし活躍中。『日本文化芸能を普及する活動』としてNHK大河ドラマを始め多くのドラマの文化・芸能を考証し考案・指導する『芸能考証・指導』も勤めている。無類の『あんこ』好きである。日本大学芸術学部音楽学科非常勤講師。たいとう観光大使。NPO法人ACT・JT理事。



平野 真敏

Masatoshi Hirano

ヴィオラ・アルタ奏者

R.ワーグナーによって奨励され、バイロイトで活躍した幻の楽器「ヴィオラ・アルタ」の世界でも数少ない独奏者として、国内外で演奏・講演を展開。東京藝術大学及びデトモルト音楽大学ドルトムント校卒業。クロアチア共和国ザグレブ市より、同国の芸術に貢献した功績に対し市民表彰を拝受。代表的な著作として『幻の楽器 ヴィオラ・アルタ物語』(集英社新書)がある。